

第44回 七五読み古事記勉強会

大穴牟遲神逃亡

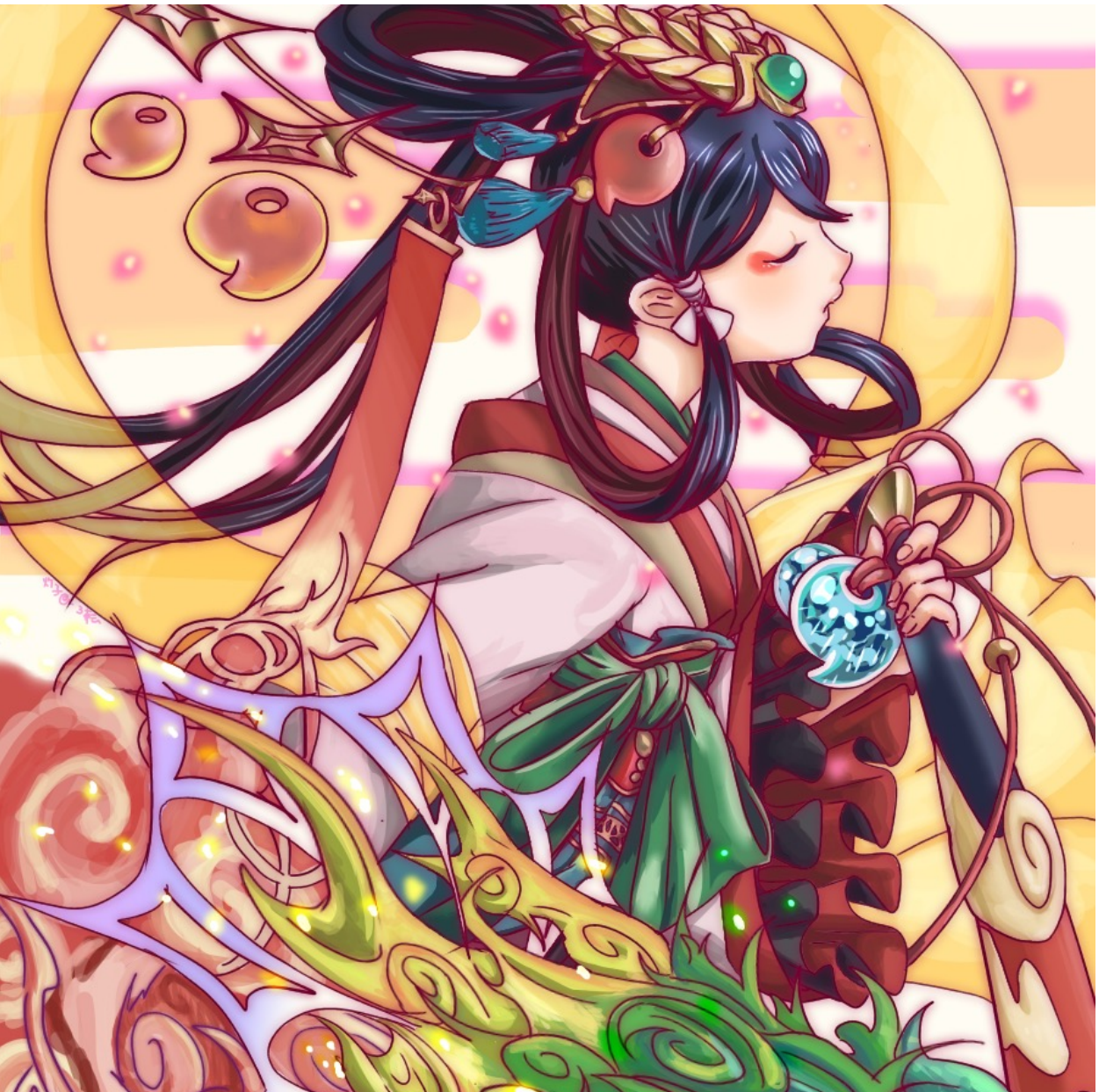
倭塾サロン
小名木善行

泉比良坂



前回までのお話

須佐能男命のいる根の堅州国で愛妻の
須勢理毘売と出会った大穴牟遲神は、
須佐之男命から葦原色許男として
蛇とムカデと蜂の部屋の薫陶を受け
さらに野原で火に囲まれて、民衆への
深い愛の必要を学びました。



今回のお話（現代語訳）

須世理毘売は、大穴牟遲が死んだと思い、泣きながら喪具を持ってきました。

須佐之男の大神も、すでに死んだと思ってその野に出て立っていました。そこへ大穴牟遲がその矢を持ってやってきました。

そこで大穴牟遲神を家に入れて八田間（やたま）の大部屋に召し入れて、頭の虱（しらみ）を取るように大穴牟遲に命じました。

大穴牟遲がその頭を見ると、たくさんの呉公（むかで）がたかっていたいました。

すると妻の須勢理毘売がムクの木の実と赤土を取ってきて、夫に授けてくれました。

夫はその木の実を食い破り、赤土を口に含んで唾と一緒に吐き出すと、須佐之男命の大神は、大穴牟遲が呉公（むかで）を食い破って唾と一緒に吐き出していると、心に愛（うつく）しく思っ
て寝てしまいました。

そこで大穴牟遲は、須佐之男命の髪を部屋の垂木（たるき）ごとに結びつけ、五百人で引くくらいの大きな石で部屋の戸を塞（ふさ）ぎ、妻の須世理毘売を背負うと、須佐之男命の生大刀（いくたち）と生弓矢（いくゆみや）と天の沼琴（ぬごと）を持って逃げ出しました。

そのとき天の沼琴が樹に触れて大きな音をたてました。

このため寝ていた大神がこの音を聞いて驚いて、

部屋を引き倒しながら起きあがりました。

けれど垂木に結んだ髪をとかなければならなかったので、

その間に大穴牟遲は遠くに逃げることができました。

ここにそのめのはふりのつもをきたればちちのすでにしなるとそののにいでてそのやをもちてときにやしきにやたまおほむろかしらのしらみかしらにさわのそのめはむくのはにをあたへてゆゑにはきのみはにをふくめておほかみむかでつばきだせるところいとしくかみのかみとりたるきのごにいおびきいはでそのめのすせりそのおほかみのいくのゆみやにとりもちにげてあめのぬまことつちをどよめきねたるおほかみむろひきたおしたりやにゆひてあひだにとほくすせりひめもちなきておほかみもおもほしてたちぬればたてまつるひきいれてめしいれてとらしめるむかでありきのみとりふにさずくくひやぶりつばだせばくひやぶりおもほしておもひねるそのむろのゆゑつけてとをふさぎひめをおふいくのたちあめぬこといでるとききにふれてうごかしぬおどろきてしかれどもかみとけるにげましき

於是其妻須世理毘売者
持喪具而哭
来其父大神者
思已死訖
出立其野
尔持其矢以奉之
時率入家而
喚入八田間大室而
令取其頭之風
故尔見其頭者吳公多在
於是其妻取牟久木実
与赤土授其夫
故咋破其木実
含赤土唾出者
其大神以為咋破吳公
唾出而於
心思愛而寢
尔握其神之髮其室
每櫛結著而
五百引石取塞其室戸
負其妻須世理毘売
即取持其大神之生大刀
与生弓矢及其天沼琴而
逃出之時
其天沼琴拂樹而
地動鳴
故其所寢大神聞驚而
引仆其室然
解結椽髮之
間遠逃

思已死訖 すでにになると おもほして

訖

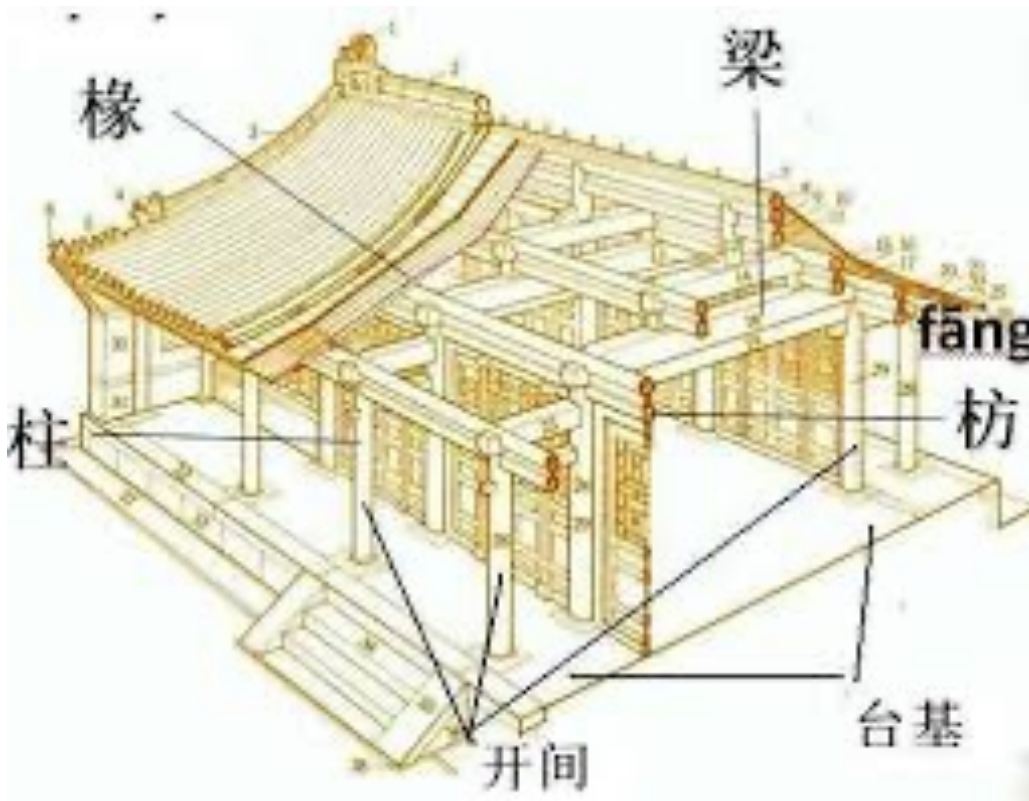
おわる（終わる）、おえる（終える）、いたる（至る）、ついに（遂に）などの意味を持つ漢字。

物事が最終的な段階に達し、完了したことを意味する。

須勢理毘売は、夫の大穴牟遲神が完全に終わったと思ったから、泣きながら葬式の道具を持ってきたのだ・・・と描写している。

古来より、人の上に立つ家の娘には、常に凜とした姿勢が求められていた。

毎椽結著而 たるきのごとに ゆゑつけて



椽

「たるき」と読む。

象 (タン) は、お腹の垂れた豕 (ぶた) を表す象形文字で、これに木材を表す「木」を加えて、屋根を支えるために棟から軒に渡す丈夫な木材を指す。この椽に、髪の毛を縛り付けた。

生大刀 生弓矢



失われた古楽器「十三弦琴」
いまある和琴（わごん）は六弦



琴弾山神社

〒690-3204 島根県飯石郡飯南町佐見 4 7 2



